

## 《創立30周年記念号の発行にあたって》

島 山 武 道

北海道自然保護協会が1964年に発足してから30年がたちました。また、1979年には、北海道から自然保護団体としては数少ない社団法人の認可を受け、財政や活動の基盤を強化し、今日にいたっています。そこで本号は、特集を組み、この30年の歩みをふりかえることにしました。

この間に、当協会を囲む情勢は大きく変わりました。協会発足当時は、水俣や四日市で深刻な公害が発生する一方で、国立公園内に観光目的の道路やロープウェイがつぎつぎと作られました。そのため、住民の運動も、公害反対運動や国立公園内の大自然を保護する運動が中心だったのです。しかし、その後の列島改造ブームや大規模開発ブーム、さらに最近のリゾートブームの中で、自然破壊はごく身近なところにまでせまり、子供のころから見なれた里山、海岸、河川、田畑、湿地などがつぎつぎに姿を消しました。こうした様子を目の当たりにみて、自然保護の重要性に気づいた多くの住民が、自然を守るためのさまざまな運動に参加するようになったのです。

また、自然保護に対する考えも大きく変わりました。当初は、貴重でかけがえのない自然や動植物を守ることが中心でした。しかし、自然は、貴重な動植物種だけでなっているわけではありません。貴重な種も貴重でない種も自然界では対等であり、全体が相互の関連とバランスを保って生きているのです。そのため、貴重な種を切り離して保護するのではなく、周辺の動植物を含めた生態系を、さらには相互一体となっている森林、河川、海岸などの流域全体を保護することが必要だという考えが強くなりました。また、自然の生態系は非常にこわれやすいものです。そこで、ひとつでも多くの種の絶滅を防ぐために、生物多様性の保護という考えも主張されているのです。

当協会の歩みも、このような社会情勢や自然保護思想の変化を反映しています。今からみると、不十分な点や批判されるべき点もありますが、当協会は、全体的にみると、当初の学者・経済人を中心とする団体から、一般市民や学生が広く参加し、活動できる団体へと発展してきたといえます。しかし、北海道の自然をとりまく状況を見ると、さらに多くの地域で、さらに多彩な運動を展開する必要があります。そのためには、いっそう多くの人の支持と参加が必要です。

そのためにも今回の30周年記念号が、当協会の現状と過去の先輩達の活動を知る一助となり、さらに多くの会員のみなさんから、要望や意見がよせられることを願っております。

はたけやま・たけみち

1944年旭川市生まれ。

1989年から北海道大学教授。

94年から本協会副会長。

専攻は行政法学。『アメリカの環境保護法』  
『環境行政判例の総合的研究』（いずれも北大図書刊行会）などの著書がある。